

事例2 社会へのパスポート 「志」

大学が社会と連携し、 社会を担う自信を育てる

内定率の低下、就業力育成など大学と社会の接続部分には課題が山積している。このようななかで、大学教育と実社会での体験を連携させることで、大学での学びの価値を高め、社会で活躍できる人材を育成する取り組み事例を紹介する。

ケース1 京都産業大「コーオプ教育」

自己実現のエネルギーを 大学と社会の学びの融合で培う

京都産業大で「コーオプ教育」(下コラム参照)が行われるようになってからは、近年の学生に共通する気質の変化があった。それは自己実現に向かって歩き出す力が不足し、目的や問題意識を持って講義に臨んでいないというものだ。

「そこで、従来から行われてきた、



京都産業大
キャリア教育研究開発センター
運営委員長 経営学部教授
後藤 文彦
Goto Fumihiko

学生にとって効果の高いインターンシップを、4年間の大学での学びと強固に結び付けたいと考えました」とキャリア教育研究開発センター運営委員長の後藤文彦教授は説明する。「短ければわずか数日で終わってしまうインターンシップでも、学生は我々が驚くほど多くの気付きを得て、大学に帰ってきます。大学(オン)と社会(オフ)の学びを融合させるために、毎年必ず実社会で学ぶプログラムを策定しました」

インターンシップで最大の効果を得るため、コミュニケーション力の育成、現場で得た気付きを大学での学習に生かす方法、更に社会で必要なスキルを育むためにコーチングやファシリテーションを活用するなど、学内の教学体制も充実させた。「1年生では自分自身について考えるレポートの作成や、先輩学生へのインタビューなどを通して『なりたいもの』に気付く。2年生ではその実現のために『やるべきこと』を知り、そして3年生までの実社会での体験を通して自分が『出来ること』を知るのです」(後藤教授)

大学での学びを自分に必要なものとして受け止める、いわば自己実現のエネルギーを培うプログラムだ。

京都産業大のコーオプ教育

◎京都産業大のコーオプ教育 (Cooperative Education) は、大学が主導で管理運営する就業体験プログラム。教職員の連携の下、学内での学習と就業体験を交互に繰り返す「O/OCF (オン/オフ・キャンパス・フュージョン)」を展開する。更に、学んだ知識を活用しながら、企業から与えられた課題を学年・学部を横断したチームで解決するPBL (Project-Based Learning) プログラムに進化させ、大学の学びと実社会での学びの融合を強化している。PBLプログラムを取り入れた現在のO/OCF-PBLは25人1クラスの少人数制で実施。学生は実社会での体験を通して、職業観を育むとともに現場で求められる能力を知り、大学での学問の重要性を再認識していく。 Webサイト <http://www.kyoto-su.ac.jp/path/career/ce/>

体験した大学生が振り返る

実社会に触れることで 主体性と広い視野を得ました

京都産業大経営学部3年 仙田満利さん

「現場を学んでほしい」と
企業から率直な声も

O/OCF-PPBL (P28)のコラム参照)に初めて参加したのは2年生の4月です。私が参加したのは医療機器メーカーの「人にやさしい診療空間 今までにない新型歯科診療台の構想」というプログラムでした。週1回の授業とは別に、週2日ほど自主的に集まり、30年後の構想を議論しました。

途中、企業の担当の方に中間報告

をするのですが、そこで自分たちの考えと企業が求めているものに大きなギャップがあることが分かりました。担当の方からは「現在の事業に役立つ提案をしてほしい」「現場に来て学んでみてはどうか」といった指摘をいただきました。

それを契機に、工場見学に出かけたり、歯科診療のニーズ調査を行いました。徹夜で資料をまとめることもありました。途中で抜けたりしませんが、グループの仲間や企業の方に迷惑がかかりますから。

グループでやり抜くことの
大切さも学ぶ

3年生では、旅行会社の「京都環境ツアーの企画立案」に取り組みました。実際に自分たちの企画が商品



旅行会社の担当者とは頻りに打ち合わせを行った。企画立案に向けては、広く意見を聞くために消費者にヒアリングも実施。「こんな値段なら自分は行かない」と言われたことも。消費者の本音を知ること出来た

化されると知り、こんな機会はめったにないと意気込みました。

前回の取り組みで企業の方とのコミュニケーションの大切さを実感していましたから、今回は自分たちから積極的にコンタクトをとるようになりました。ほぼ毎週、担当の方と会って話し合いました。

苦労したのは、作業が遅れたり、休んでしまった下級生へのフォローです。自分でやってしまったほうが早いと思うこともありましたが、全員で取り組むのがこのプログラムの趣旨なので、最後までグループ全員

でやり抜こうと思っていました。

企画が完成するまでには募集に関する制約などいろいろな壁にぶつかりましたし、商品化されたあとも最少催行人数に達するまでに本当に苦労しました。でも、大学生でありながら社会人のような体験をしたことで、いろいろな視点で物事を捉え、能動的に行動していけるようになってきたと実感しています。ゼミなどで先生の話や聞きとくときも、実社会で働く社会人だったらどう考えるのかと、視点を変えながら聞けるようになってきたと思います。



仙田さんのグループは「地産地消」をテーマにした旅行を企画。旅行会社の担当者も「自分もこれかかないと思う」と共感してくれたという

社会問題と直面することで 潜在能力を引き出す

早稲田大の「WAVOC」（下コラム参照）では、ボランティアに関するさまざまな科目と、国内外30を超えるプロジェクトを、学部・学年を問わず学生に提供している。学生が社会に貢献しながら、体験的に学ぶ場がつけられた背景を、WAVOC元所長の堀口健治教授は「自立して学ぶ契機として、社会との接点を提供した」と説明する。

「例えば、地方で農作業に従事するのは、多くの学生にとって初めての楽しい体験でしょう。しかし、現地の人々と触れ合うなかで、過疎化・高齢化・耕作地放棄など地方が抱える問題が見えてくる。その気が付きが大学に戻ってから学んでいくモチベーションにつながります」



早稲田大前副総長
WAVOC元所長
政治経済学術院教授
堀口健治
Horiguchi Kenji

近年、学生と接する教員から「理論を教えても、それが学生のなかで自分のものとなりにくい」という声があがっていたという。多様な生活体験が乏しい現代の若者は、理論を実社会と結び付け、イメージすることが容易ではない。保護者や教師、友人以外のさまざまな人々と接して、学生自身の世界を広げる機会を大学として提供することが必要になってきたのだ。

「現場に泊まり込み、農作業などをして気付いたことを学生が発表するのですが、現地の人からすれば甘い考えも多い。感謝されることだけではなく、叱られることもたくさんあります。学生にとっては、その体験が今後考えていくための土台となります」（堀口教授）

体験が乏しい現代の若者を、そのまま社会に送り出すことは出来ない。大学が社会について真剣に考える場を提供できれば、学生はモチベーションを高め、潜在能力を発揮する、と堀口教授。社会に出るための足腰を鍛える取り組みと言えるだろう。

WAVOCボランティア支援者

菅沼弘夫さん

学生たちが力を発揮する
きっかけになりたい



千葉県で小学生を対象とした「里山わんぱく塾」を主宰しています。豊かな自然環境の里山で遊びながら、たくましく生きる力を育み、

情操豊かな子どもを育てることが目的です。WAVOCの学生たちには、里山の草刈りや遊具づくりなどをやってもらっています。初めて手にする農作業器具に戸惑いながらも、根気強く働く学生の姿には驚かされました。また、学生同士で話し合っ、子どもたちが自然の大切さについて考える紙芝居やゲームなども提案してくれます。学生たちは、みんな高い能力を持っています。あとは、その力を自分の意思で発揮する糸口が必要なのではないでしょうか。里山で経験したことが、いつか学生たちの成長のきっかけになることを信じています。

「世界をちょっとでもよくしたい

～早大生たちのボランティア物語～

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター著 / 早稲田大学出版部発行



◎ストリートチルドレン、DV、ハンセン病などの国内外の問題と向き合い、ボランティア活動に取り組む学生たちの姿を紹介。

WAVOCとは

◎正式名称は「早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター」。教育、研究という大きな使命に加え、これからの大学は社会貢献にも積極的に取り組むべきという考えから2002年に発足した。ボランティア活動の情報提供や仲介を行う従来型の機関と異なり、ボランティア関連の科目を設置し、大学としてさまざまな分野におけるボランティアプロジェクトへの学生の参加を促す。基本的な学びのサイクルは、まずボランティア関連の講義科目で現場を理解するために学術的に学び、体験的学習科目で実際に国内外の現場を訪れ、現実を理解する。そして環境や農業、教育、人権といったテーマで国内外で展開されるボランティアプロジェクトに取り組む。その後、学生同士、あるいは教員を交えた振り返りの場を経て、体験を自分のなかで価値付けし、社会と自分の関係を考えていく。いずれの場面でも、教員や現場体験の豊富な専門職員が支援していく。 Webサイト <http://www.waseda.jp/wavoc/>

体験した社会人が振り返る

さまざまな人々と広くつながり続け、 自分の世界を変えていく力を得ました

JR北海道勤務 早稲田大社会科学部卒 **大藤将太**さん

真剣に向き合ってくれる 農家の方々との出会い

大学に入学したときの私には、4年間でこれに取り組もうという確固たる目標はまだありませんでした。大学生活に期待も抱けないまま、アパートの一室で講義要項を眺めていたとき、「農山村体験実習」という文字が目飛び込んできた瞬間が、私とWAVOCとの出会いでした。北海道から上京した直後で、祖母が作るおいしい野菜を懐かしく思い出



していたからかもしれません。

WAVOCの説明会に参加して、その活動が学外のいろいろな人とのつながりで行われていることを知り、仲間内だけで盛り上がるサークル活動などは全く違う。同じ大学生なのに、こんなに外向きのエネルギーを持った人たちがいるということに感動しました。

一歩踏み出す力を WAVOCで身に付けた

1年生の4月から国内の農業プロジェクトに参加しました。山形県の農山村で農業体験をし、農家の方々と話をしたのですが、「1回くらい来ただけでは日本の農業の実態は分からない」と言われたのです。学生に真剣に向き合ってくださいる農家の方々に接して、用意された体験をこなすだけではなく、自分が出るこ

とが何かを考え始めました。

11月からは千葉県の「里山わんぱく塾」にも参加しました。主宰の菅沼さんは、どうすれば子どもたちが楽しみ、学ぶ力を身に付けていくかを常に考えている方でした。私たちも、先輩から引き継いだ活動を繰り返すだけで終わらないように、こんな活動をしてはどうかと話し合い、提案しました。

1年生のときはWAVOCの活動で、学外のいろいろな世界を見て、そして2年生からは、先輩や学外の人たちとどうつながり、WAVOCの活動をより良くしていくかという



「里山わんぱく塾」での子どもたちとの自己紹介の様子(右)

故郷・札幌でも農業生産者との交流会に参加。その様子は新聞にも取り上げられた(下)



朝日新聞 2010年10月3日刊

ことに意識が向いていきました。

卒業直前までWAVOCの活動に参加したことで多くのものを得ましたが、その一つが一歩を踏み出す力です。世界は自分の活動で変えられる。そして、活動を楽しみ、そのなかで考え、気付いたことを発信し、また動く。楽しいだけで終わらせず、得たものを次にどう生かすのが大切だということを学びました。

就職活動は「地域の活性化に貢献できる仕事」を目標にして活動しました。今、北海道に戻り、不動産開発の部署で働いています。農家の方々と環境教育に取り組むNPOなど、地域で頑張る人々と広く連携しながら、地域の魅力を生かす取り組みをしていきたいと思っています。